

ラワン語の対格小辞の機能

東京外国語大学 大西秀幸

1 はじめに

本発表ではラワン語^{*1}の対格小辞の分布を土台にして、Malchukov et al.(2010) が提案する配列タイプを個別言語の記述に援用する際に起こった問題を挙げる。

ラワン語では P 項と R 項が対格で示され (対格小辞を付加する)、T 項は必ず絶対格で示される (格標識はもたない)^{*2}。すなわち格標示の点で P 項と R 項を同様に扱いながら T 項を別に扱う。これは Malchukov et al.(2010) が指摘するところの secundative タイプの配列の特徴と一致する。一方で対格小辞は P 項を標示するときには DOM(differential object marking) を見せるのに対し、R 項を標示するときにはそれが見られないという点も指摘できる。この違いが生まれる理由をそれぞれの項を標示する対格小辞の機能の違いに求めた場合、P 項、R 項、T 項は機能の違う小辞で別々に扱われるということになり、これはむしろ tripartite タイプの配列の特徴といえる。

1.1 ラワン語ダル方言の複他動詞構文の概観

ラワン語の複他動詞文について詳しく論じた記述はほとんど見つかっておらず、数少ない記述も他動詞文の項目の中でいくつか例文を挙げている程度である。その中で、マトワン方言を方言を対象にした LaPolla(2011: 5) には「複他動詞といえるのは zì「与える」と、ɿl「紹介する」の 2 つだけであり、その他の複他動詞は、専ら他動詞からの派生によって作られる。」という記述があるが、この点は筆者によるダル方言の調査によっても確認されている。以下、筆者の調査を基にして複他動詞文について概略をまとめる。複他動詞構文は格配列

^{*1} ラワン語 (Rawang) は、ミャンマー連邦共和国・カチン州 (Kachin state) の北部でラワン人によって話されている言語で、チベット・ビルマ語派 (Tibeto-Burman) のうち中央チベット・ビルマ語群、ヌン語支 (Nungish) に属する言語である (Ethnologue 参照)。ラワン語には 70 ほどの変種が存在することが Morse(1988) で指摘されているが、本発表で記述の対象とするのはダル方言である。特に断りのない限り、本発表で「ラワン語」と表現するものはダル方言を指す。発表者によるこれまでの調査でダル方言は次のような文法特徴を持つことがわかっている。

基本語順：SV、APV

語類：名詞類 (名詞 (普通名詞、指示詞、代名詞)、数詞)、動詞類 (自／他動詞)、副詞類 (副詞)、小辞類 (助動詞、後置詞、類別詞など)

句構造：((...) は任意要素、<... > は屈折要素)

名詞／格句構造：[CSP [NP (指示詞 +) 名詞 (+ 数詞)(= 類別詞)] = 格小辞]

動詞句構造：[VP(否定辞-)(使役化-) 動詞 (= 助動詞)(-TAM) <-人称／数>]

本発表で用いる主要なデータは発表者がラワン語ダル方言母語話者の協力のもと行った調査から得られたものである。

^{*2} 格標識をもたないということはゼロ小辞を立てるという分析ができる可能性もあるということである。しかしゼロ小辞を立てるか否かについてはまだ議論の余地が残っている。本発表では、格標識をともしない形式を「絶対格であられる」と表現する。

と動詞の側に現れる人称・数の一致によって定義できる*3。

格配列 複他動詞構文の R 項は、単他動詞構文と同じく対格で示される。(1) と (2) に実例を挙げる。

(1) 単他動詞構文

əpūŋ=i(A) [ədū=səŋ(P)] ədūl-ù.
PN=ERG PN=ACC 殴った-3P
「アブンはアドウを殴った。」

(2) 複他動詞構文

əpūŋ=i(A) [ədū=səŋ(R)] lēgābok(T) zī-ù.
PN=ERG PN=ACC 本 与える-3P
「アブンはアドウに本を与えた。」

人称・数の一致 複他動詞文の動詞の人称・数接辞は T 項ではなく R 項の人称・数に一致する。(3) に実例を挙げる。

(3) 複他動詞文

[ŋàŋŋ=səŋ(R)] lēgā tiʔ=bok(T) laʔ-è-zì[-nìŋ].
1PL=ACC 本 一=CL(BOOK) IMP-N1-与える-PL
「我々に一冊の本をください。」

1.2 secundative タイプの配列について

複他動詞の R 項と T 項のどちらが単他動詞の P 項と同様に扱われるかに関して、Mulchukov et al.(2010) では類型論的に以下に示すような分類がなされている。

indirective タイプの配列 R を PT から区別して扱うタイプ (T=P/R)

secundative タイプの配列 T を PR から区別して扱うタイプ (T/P=R)

neutral タイプの配列 TPR が同様に扱われるタイプ (T=P=R)

tripartite タイプの配列 TPR が別に扱われるタイプ (T/P/R)

2 ラワン語の格配列は secundative タイプか

(1) と (2) で例示したように、P 項と R 項はいずれも対格小辞=səŋ が付加され対格で示される。そして T 項は必ず絶対格で示される。この言語事実を見るとラワン語の格配列は secundative タイプの配列とみることができそうである。

3 対格小辞=səŋ の分布にみる機能的差異

ここで対格小辞=səŋ についてより詳しくみていく。=səŋ には 1.1 で示したように、単他動詞構文において P 項を示す機能と複他動詞構文において R 項を示す機能がある。一方で=səŋ の分布に目を向けると、P 項に

*3 ラワン語では他の語との関係を名詞の側に標示しながら動詞にも標示することができるという点で Nichols(1989) で指摘するところの **Double-marking language** の特徴を持つといえる。

付加されるか R 項に付加されるかによって、3.1 と 3.2 で述べるような違いがみられる。

3.1 P 項の標示

対格小辞=səŋ は P 項に付加されるが、P 項であれば必ず səŋ に付加されているということではなく、以下に示す条件によって絶対格との選択がなされる。

3.1.1 定性との関係

P 項が定^{*4}

のとき必ず対格で示され、P 項が不定のとき必ず絶対格で示される。

(4) 不定 (話し手と聞き手の間で具体的に何を指しているかが了解されていない) なので絶対格で示される

àŋ=í (tiʔpè) sət-ù.
3SG=ERG 誰か 殺す-3P
「彼は誰かを殺した。」

(5) 不定 (総称) なので絶対格で示される

àŋ=í (əgí) cā-ù=ē.
3SG=ERG 犬 知る-3P=NPT
「彼は犬 (という生き物) を知っている。」

(6) 定なので対格で示される

àŋ=í wē=gá (əgí=səŋ) sət-ù.
3SG=ERG その=CL(ANIMAL) 犬=ACC 殺す-3P
「彼はその犬を殺した。」

3.1.2 名詞句のタイプとの関係

P 項が代名詞であれば必ず対格で示される。

(7) 代名詞なので対格で示される

kàŋ=í (àŋ=səŋ) sət-ù.
虎=ERG 3SG=ACC 殺す-3P
「虎は彼を殺した。」

(8) 代名詞ではない名詞で且つ不定なので絶対格で示される

^{*4} 名詞句の指示する対象が、(a)、(b) の両方を満たすものを「定である」と呼び、一つでも満たさないと「不定である」と呼ぶ。

1. 話し手と聞き手の間で具体的に何を指しているかが了解されている。
2. 総称でない。

kàŋ=í (ə̀sàŋ) sət-ù.
 虎=ERG 人 殺す-3P
 「虎は人を殺した。」

(9) 不定だが代名詞なので対格で示される

kàŋ=í (kāqū=sə̀ŋ) sət-ù=lé.
 虎=ERG 誰=ACC 殺す-3P=Q
 「虎は誰を殺したの？」

3.1.1 と 3.1.2 で例示したように、P 項が対格で示されるのは、P 項の名詞句が代名詞のとき、あるいは定名詞句のときであるということがわかる。対格小辞の分布から対格小辞の機能を考えたとき、ラワン語の対格小辞の機能について以下のような仮説が立てられる。

仮説① ラワン語の対格小辞の機能

対格小辞=sə̀ŋ は代名詞か、定の名詞句に付加されて、その名詞句が P 項であることを示すために機能する。

3.1.3 話題化との関係

P 項が話題化^{*5}されるときは、必ず絶対格で標示される。(10) に実例を挙げる。

(10) (àŋ=nēr) kàŋ=í sət-ù.
 3SG=TOP 虎=ERG 殺す-3P
 「彼は虎が殺した。」

したがって 11 は非文と判断される。

(11) (*àŋ=sə̀ŋ=nēr) kàŋ=í sət-ù.
 3SG=ACC=TOP 虎=ERG 殺す-3P
 「(彼は虎が殺した。)」を意図

これは P 項のみにみられる現象である。例えば A 項を話題化するとき (12) に例示するように話題化しながら能格で示すことができる。

(12) (kàŋ=í=nēr) àŋ=sə̀ŋ sət-ù.
 虎=ERG=TOP 3SG=ACC 殺す-3P
 「虎については彼を殺した。」

この現象を仮説①と関連させて説明する。話題化されたときに対格で示せないのは、対格小辞が定の P 項に付加されるからである。名詞句が話題化されていれば意味上、定であることが前提になるため、さらに定で

^{*5} 「～については」のように談話の中で話し手が特に語りたがっている要素は、話題化小辞 (=nēr) を付加したうえで文頭に移動させるのが一般的である。この操作を話題化と呼ぶ。

あることを示す小辞をつけることができない。

3.2 R 項の標示

次に R 項を示す場合の分布をみる。単他動詞構文においては、名詞句のタイプや定不定、あるいは話題化されているか否かによって対格か絶対格かが選択されていたが、複他動詞構文においてはそのような現象がみられない。実例を (13) と (14) に挙げる。

(13) P 項が不定であれば必ず絶対格で示される

əpāŋ=í (tiʔpè) ədūr-ù.
PN=ERG 誰か 殴る-3P
「アプンは誰かを殴った。」

前述のように P 項が不定であれば対格で示すことはできない。一方、R 項は不定であっても必ず対格で示される。(14) を見られたい。

(14) R 項は不定であっても必ず対格で示される

əpāŋ=í (tiʔpè=səŋ) lēgā zī-ù.
PN=ERG 誰か=ACC 本 与える-3P
「アプンは誰かに本を与えた。」

このように、R 項は定性に関係なく、どんな名詞句であっても必ず対格で示される。この分布から=səŋ の機能について以下のような仮説を立てる。

仮説② ラワン語の対格小辞の機能

対格小辞=səŋ は複他動詞構文内の中核項の標示において生じうる曖昧性を解消する (disambiguation) ために機能する。

複他動詞構文では A 項、T 項、R 項の 3 つの項が現れるが、R 項が必ず対格で示されることで、A 項が能格、T 項が絶対格、R 項が対格でという形で常に区別して示されることになり、格標示における曖昧さがなくなる。

=səŋ が複他動詞構文において、曖昧性解消のために機能していることの傍証として R 項を話題化したときに、=səŋ が現れないということが挙げられる。3.1 で述べたように P 項が話題化されると対格で示すことができない。実例を (15) に挙げる。

(15) P 項が話題化されていれば対格では示せない

(lēgā=nēr) əpāŋ=í rù-ù.
本=TOP PN=ERG 読む-3P
「(今話題にあがっているその) 本はアプンが読んだ。」

一方 R 項が話題化される場合もやはり対格では示されない。(16) に実例を挙げる。

(16) R 項が話題化されていれば対格では示せない

əd̪ā=nēr əp̪āŋ=í lēgā zī-ù.

PN=TOP PN=ERG 本 与える-3P

「アドゥにはアプンが本を与えた。」

R 項が話題化されたときに対格で示すことができないことは仮説②に関連付けて説明できる。R 項には話題化小辞が付加されることで他の項との曖昧性が解消できるため、=səŋ による曖昧性解消の必要がなくなり、=səŋ が付加できない。

3.3 まとめ-ラワン語の格配列は secundative タイプか（再）

対格小辞=səŋ は一見 P 項と R 項に付加することができるので、絶対格で表される T 項も考慮して secundative タイプの格配列を見せているように思える。しかし、対格小辞=səŋ の機能に注目すると別の見方もできる。対格小辞は P 項に付加されるときに名詞句や定性との関連で絶対格との選択がなされるが、R 項に付加されるときはそのような選択はない。この分布の違いは別の機能を持つ小辞がそれぞれの項に付加されていることによるのかもしれない。すなわち P 項には仮説①の機能をもつ小辞が付加され、R 項には仮説②の機能を持つ小辞が付加されている。もしそのように考えるならば、ラワン語は P 項と T 項と R 項が共時的には機能の異なる小辞で標示されていることになり、secundative タイプの格配列ではなく、tripartite タイプの格配列をみせることになる。

Malchukov et al.(2010) が示す類型論的な格配列のタイプをラワン語の記述に援用することで、格標示に関する言語内部の問題点が明らかになった。今後は対格小辞の歴史的起源も含めより詳細な調査を行っていくつもりである。

略号一覧

*: 調査協力者によって非文と判断されたことを示す / -: 接辞境界 / =: 接語境界 / [空白]: 語境界 / 1・2・3 話し手人称・聞き手人称・第三者人称 / A: A 項 / ACC: 対格 / ALL: 向格 / CL: 類別詞 / ERG: 能格 / NEG: 否定 / NPT: 非過去 / P: P 項 / PN: 固有名詞 / PL: 複数 / Q: 疑問 / R: R 項 / SG: 単数 / TOP: 話題化

参考文献

- [1] LaPolla, R. J. (2011). On transitivity in two Tibeto-Burman languages. *Studies in Language*, 35(3), 636-649.
- [2] Malchukov, Andrej, Martin Haspelmath and Bernard Comrie, eds. (2010). *Studies in ditransitive constructions: a comparative handbook*. Berlin: De Gruyter Mouton
- [3] Morse, Stephen A. (1988). Five Rawang dialects compared plus more. *Prosodic analysis and Asian linguistics: to honour R. K. Sprigg*, ed. by David Bradley, Eugenie J.A. Henderson and Martine Mazaudon, 237-250.
- [4] Nichols, J. (1986). Head-marking and dependent-marking grammar. *Language* 62, 1, 56-119.